

(別紙)

「スピロピジオン農薬蜜蜂影響評価書（案）」に対する意見・情報の募集に寄せられた意見・情報及びそれに対する考え方

	御意見	御意見に対する考え方
1	開花期にきゅうりに散布した花粉花蜜残留試験の結果を用いていますが、開花直後のデータが不足していると思われます。散布から花粉花蜜採取までの期間が0～3日などとなっており、これは、散布の0,1,2,3日後に採取した花粉や花蜜を合わせて分析したということではないでしょうか。その場合、0～3日の残留値は最大の残留値を見ているとは言えないと思います。図4に示されていますが、本剤の残留値は散布後の時間経過とともに減少しています。また、きゅうりは、個別の花の開花期間は長くても1日程度ではないでしょうか。そのため、散布の翌日以降に採取した花は、散布時には蕾の状態であったはずで、薬液が直接花粉や花蜜にかかっていないと考えられます。従って、散布の0～3日後の残留値は、きゅうりの花粉花蜜における最大の残留値を示しているとは思えません。散布直後に花粉花蜜を採取していれば残留値はもっと高かったと考えられ、総花蜜相当残留濃度25000ppbを超過する可能性は否定できないものと考えます。	スピロピジオンのミツバチへの影響評価における第2段階評価に用いた半野外試験（採餌試験）では幼虫を含むミツバチの群にスピロピジオンを6週間暴露させ、その後約110日間ミツバチの群への影響を観察した結果、無影響濃度を25,000 ppbとしています。 このため、仮に散布当日のスピロピジオンの総花蜜相当残留濃度が25,000 ppbを超え、その花粉や花蜜をミツバチが採餌したとしても、無影響濃度を超えて本剤が残留する花粉や花蜜を長期間に渡って採餌し続けることにはならないため、ミツバチの群の維持に支障を及ぼすおそれはないと考えます。
2	適用作物を選べば全く使用が不可能とは思われないが、第2段階評価の必要があるような作物については花粉・密からの幼虫への悪影響が不安に思われた（なお、それなりに多くの食用のうり科作物について、収穫期帯（畑あるいは植物体全体としての収穫期。）においては、花をきっちり避けての葉茎散布は幾分難があるのではないかとされる。その様な作物についてはぱっとうり科作物が思い浮かんだので一例として挙げておくのであるが。）。 実際、19頁にある蜂群崩壊率はそれなりに考慮すべきと思われるような値を示しているように思われ、これは問題が無くはない事を示しているように思われる。 安全性を考慮しての適用作物選定（及び時期選定）を行う事が必要ではないかと思われた。（なお、当方としては、多くのうり科作物について、収穫期等（畑あるいは植物体全体としての収穫期。）においては（ハウス等の隔離環境以外では）使用しない方が良いのではないかというような印象を持った。）	ミツバチへの影響評価は段階性を採用しており、第1段階評価はミツバチの群に対する安全を十分見込んだ評価、第2段階評価はミツバチの群を用いた実環境に近い条件での評価となっております。 スピロピジオンのミツバチへの影響評価における第2段階評価に用いた半野外試験（採餌試験）では幼虫を含むミツバチの群にスピロピジオンを6週間暴露させ、その後約110日間ミツバチの群への影響を観察した結果、無影響濃度を25,000 ppbとしており、花粉・花蜜残留濃度が無影響濃度を超えない場合、影響がないと判断しています。 なお、スピロピジオン農薬蜜蜂影響評価書19ページの表12に記載の蜂群崩壊率における無影響濃度は>50,000 ppbであり、第2段階評価で用いている無影響濃度25,000 ppbより高濃度であることから、蜂群崩壊率を考慮してもミツバチの群の維持に支障を及ぼすおそれはないと考えます。

※寄せられた御意見をそのまま掲載しています。